

まんだら通信

第152号 (通巻184号)

平成21年(2009)02月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
http://www.shiunji.org/
Mail post@shiunji.org

釈尊最後の教え

「この写真、見たことある」「この話も聞いたことがある」という方もおいでと思いますが、何といても今月はお釈迦さまが涅槃に入られた月。
それに、忘れた人や、新しい読者もおいでですから。

北インド。マルラ族の国であるクシナガラ。のサーラの林。
二千五百年前の二月十五日、満月の輝く夜でした。

一昨年、あそか工芸で働いている皆さんと一緒に、お釈迦さま最後の旅の跡をたどりました。そして最後に沐浴された川から、最後に説法をされた場所を経て茶毘の場所まで、お釈迦さまがそうなさったように歩きました。

その夜、最後の教えとなった『遺教経』を感じ無量の思いでお唱えしました。



遺教経はその最後の教えで、今はの際に臨む親が愛し子に諭すように、戒について、禪定についてなど、懇切丁寧なお言葉が連ねられています。

その中の一節に「弟子達よ。施された食事に好き嫌いがあつてはならない。飢えを凌ぎ、身体を支えるためのだから、少しのものが満足するように。美味しいものや珍しいものなど、もつともつとと求めることで、供養してくれた人の善意を、蔑ろにすることがあつてはならない。」というお言葉があります。

南の仏教国では、今でも毎朝の托鉢でその日その日の食事を載っていますし、スリランカでは、お檀家が毎朝お寺に食べ物を届けて、お坊さんに供養するのだそうです。日本のお寺は自分で買った食材で食事をします。

但し、そのお金のもとはお布施ですから、本質は同じですね。

また誰であつても、汗を流し苦労しながら、人さまの役に立つことをして手に入れた給料や代金で買ったものですから、粗末に扱って良いわけではありません。

このように考えると、折角の食べ物を捨てたり『飽食の時代』や『メタボリック症候群』などの言葉が流行るといふのは、矢張りおかしいと言わざるを得ないですね。

また『少欲知足』について、次のように仰います。

「弟子達よ。欲の多い人は、多く求める故に、手に入らぬという悩みも多い。欲の少な

い人は、人に諂つたり、自分を良く見せようとしなから、悩みも少ないのである。また、少しのものが満足する人は、たとえ地べたで暮らすようなことがあつても、心は穏やかであるけれども、欲の多い人は天上の宮殿に住んだとしても満足することがない。

足るを知る人は、貧しくとも裕福であり、足るを知らない人は、いつも欲望に引きずられて、穏やかな暮らしからほど遠いと言ふべきである。」と。

平安時代の末、鴨長明が『方丈記』を書きました。ご存知の通りこの題名は彼の住まいに由来しますが、十尺四方、三坪に足りない家に住んでいたわけですね。

鎌倉時代、吉田兼好が『徒然草』を著しました。どちらも、千年から八百年もの間、読み継がれている大ベストセラーです。

これを受けて中野孝次さんは、持ち物の多い少ないでなく、心の豊かさが人にとって本当の幸せであるという『清貧の思想』をお書きになって、これもベストセラーになりました。

幾度も書くように、日本人は古来、お金の多い少ないではなく心の清らかさや、他人への思いやりが大事と言うことを承知して、お釈迦さまもきつと褒めて下さる、世界でも珍しい民族です。

大正十一年、アインシュタインが来日して「日本人を作ってくれた神に感謝する。」と称賛した話を聞いたことがありますし、似た話は星の数ほどあります。

今、『百年に一度の大不況』と世界中が狼狽していますが、それどころか、日本は『千年に一度』の、歴史始まって以来の敗戦の焼け野原から立ち上がった国です。貧しいことが恥ではなく、嘗てそうであったように、『少欲知足』が幸せになる近道、ということに一日も早く気付くことが幸福への王道だと思っています。

◆今月の涅槃図の写真は、4年前に続いて2回目の掲載です。仏画家多治見美代子さんのご指導で、家内が描いたものですが、先月見ず知らずの方からメールが届きました。

多治見さんのお所を知りたいと、インターネットで探していて、紫雲寺のホームページのまんだら通信でお名前を見つけたので、出来れば電話番号を教えて欲しい、ということでした。このことを多治見さんに伺ったところ、快く承諾されましたので、先様にお伝えしました。

インターネットという仕掛けも凄いいし、ご縁って何処にあるか分からないものと、あらためて知った次第です。

◆新聞やテレビは、「百年に一度」の春の巣分け時期に飛んできてくれることを、楽しみに待っています。◆今月の野草はムラサキサギゴケ【ごまのはぐさ科サギゴケ属】です。

そんな中でも、福祉関係、農林関係など手不足は相変わらずとか。

人が集まらない理由は、賃金が安いこと、骨が折れることだそうです。食べることが出来ないのが本当ならば、そんなこと言っておられないと思うのですが。

待遇の悪い『あそか工芸』も手不足で、「社長さん」は土日祝祭日なしの年中無休をやっています。

◆去年は、虎の子の日本ミツバチの群れに逃げられましたが、今年こそ元気に住み着いてくれるよう、今から巣箱の準備などをしながら

春の巣分け時期に飛んできてくれることを、楽しみに待っています。◆今月の野草はムラサキサギゴケ【ごまのはぐさ科サギゴケ属】です。

花の大きさは7ミリ程度。寒さの厳しい今は、所々に咲いているのですが、もっと暖かくなると沢山咲いて、小さいながら美しいものです。草丈は精々数センチ止まり。田んぼの畔など、どちらかと言うと水気の多いところを好むようです。

名前の由来は、鶯が飛ぶ姿に似ているからサギゴケで、色が紫なので名付けたのだそうです。

2009.02.09 龍渉



余滴

につぼん人情小噺 第三十八話 関取

今年も大相撲は、モンゴル勢の活躍で始まりましたが、なんと言っても人気は新大関の安馬改め日馬富士でした。

それにしても、安馬はなんでしこ名を改名したんでしょうか。

聞いたところによりますと、あれは大関になることが決まってから改名を決めたんだそうですよ。

千秋楽が終わって、部屋に戻ると、親方に呼ばれてね。親方、真面目な顔で、こう言っただとか。

「おい、お前は初場所から大関に昇進することになった。おめでとう。ただ、ひとつ言っておきたいことがある。いいか、大関になるということは、本当の意味で相撲のプロになるということだ、プロ中のプロだ。だから、名前を変えよう。アマではいけないって。」

今日は相撲の話をしたと思いますが……。

江戸の昔、大相撲は十日間だったそうです。

「二年を十日で暮らすいい男」なんて言われてきてね。そんな時代、人気がないということは恐ろしいことで、その十日間全勝優勝したのに、誰も喜んでくれないという力士がいたそうです。やっぱ、勝つても負けてもお客さんから反応がないのは、つらいことです。ですから、もちろん、ひいき客もいない。

その関取は「ワシはなんて人気がないのだろう。もう相撲はやめようか」と大変に寂しがりまして、部屋でひとりで腕を組んで悩んでいました。ふと見ますと、家の中を覗き込んでいる男がいる。「おい、表に汚ない身なりの男がわれた弟子のひとりが表に行きますと、ボロをまとったひとりの物乞いが立っていました。」

「なんだ、金をやるからどこかほかに行け」弟子が小銭をあげようとすると、その物乞いがこ

う言いました。「あつしは金がいいんじやねえ。お宅の関取にちよいと会わせてもらえませんか、聞いてきてほしいんで……」弟子は家の中に戻りまして、関取に聞きますと、「そうか」と言っただけに出ます。

「なにかワシに用事か。遠慮はいらん、中に入りなさい」

「ひとつ頼みがあるんで……。実は、あつしは関取のひいきなんです。ヘッヘッヘッ。天下の関取をこんな汚ねえ物乞いの分際でひいきなど、とんでもねえヤツだと腹を立てるかもしれないが、あつしが持ってきたものをどうか食っておくれかどうか、まず聞いてからと思つて、やつてきたんですけれどね。」

「ワシがひいきで、下さるものがある？ せつかくの思召し、快くちょうだいいたします」

「え？ 食っておくんなさる……じゃ、すぐに持つてくるから」

物乞いはどこかに行つて、そばを持つてきた。

「この井はあつしの井で、欠けてはいるけど、きれいに洗つてあるし、そばもそば屋から買ってきただもんだ。関取、どうか、食つておくんませえ」

「ありがとう。いただきます」

ふちの欠けた井に入ったそばを、関取がうまそうに食べ終わった。

「ありがてえ、関取、食つておくんさつたね」

「こちらこそ、ありがとう。いや、ワシにはひいきの客はひとりもない。大名が食べるという山海の珍味より、あんたがくれた一杯のそばは本当にうまい。どうか、これからもワシをひいきにしておくれ」

うれし涙を流しながら、関取は、物乞いに両手をついて礼を言った。

「関取、頭を上げておくんささいよ。よく言つて下さつた。さぞ心持が悪かつたろう。いま、口直ししてもらいますからね。おい、みんな、聞いたか」

家の陰から若い衆がゾロゾロ出てまいりました。酒や刺身を持ってないほど抱えて、そうこうするうちに、汚い物乞いがすっかり早変わりをして、「関

取、あつしは魚河岸の新井屋というもんです。あなたの相撲を見て、いっぺんに好きになった。それで、仲間と賭けをした。物乞いがそばを持つていったら、関取は食うかつて。あつしは食うと言つたが、仲間はみんなが食わねえと言つた。じゃあ、食つたらどうするって聞いたら、魚河岸のみんなひいきにするっていうんで、じゃあ、あつしがやつてみようということをやつたらどうだ、大名でも物乞いでもひいきという字には変わりがねえと言つた。

本当の物乞いが聞いたら、さぞ、うれしいだろうね。お前さん、関くところによれば故郷に帰るって話だが、冗談じゃねえや、お前さんが帰るって言つたつて、魚河岸が帰さねえ。

どうか、関取、これからも相撲を続けておくんささいよ。これからは、あつしらがついていきますからね。さあ、さあ、食つておくんささいよ。これは小汚ねえ物乞いのそばの口直しだよ……」

「ごつあんです……」

関取、涙があふれて止まらない……。

これがきっかけになりまして、この関取はまもなく大変な人気が出たそう。

大阪の天下茶屋に安養寺というお寺がありますが、ここに墓がある、稲川重五郎という力士の逸話でございました。

「落語界から直木賞を」を目標に執筆活動をなさっているという三遊亭鳳豊さんが、月刊MOKU二月号にお書きになったものです。

較べるのもおもしろいことですが、私の文章などと比べ物にならない暖かさがあり、やり取りの有り様が、映画の場面のように目の前に現れてきます。

ですから、今月号はどんなお話しかと、毎号真っ先に読ませてもらっています。

いつか、本物の鳳豊師匠にお会いしたいものだと思っております。